

清水遺跡 (第7・8次)

遺跡番号	208-114
調査回数	第7・8次
所在地	山形県村山市大字名取字清水南・清水北
北緯・東経	38度31分08秒・140度22分24秒
調査委託者	国土交通省東北地方整備局山形河川国道事務所 山形県村山総合支庁建設部北村山道路計画課
起回事業	第7次：東北中央道（東根～尾花沢） 第8次：一般県道村山大石田線村山北1 IC 設置工事
調査面積	4,200 m ² （第7次：1,100 m ² ・第8次：3,100 m ² ）
受託期間	第7次：平成26年4月1日～平成27年3月31日 第8次：平成26年5月7日～平成27年3月31日
現地調査	平成26年6月2日～12月3日
調査担当者	氏家信行（現場責任者）・尾形知哉・森谷康平
調査協力	東日本高速道路株式会社東北支社山形工事事務所・村山東根土地改良区・村山市教育委員会・村山教育事務所
遺跡種別	集落跡
時代	縄文時代・奈良時代・平安時代
遺構	陥穴・掘立柱建物跡・竪穴住居跡・溝跡・土坑・柱穴等
遺物	石器・土師器・須恵器・墨書土器・石製品（文化財認定箱数：24箱）



遺跡位置図 (S = 1 : 50,000)

調査の概要

遺跡は、村山市東部の最上川が蛇行する右岸部にあり、清水地区のなだらかな丘陵の東斜面上に位置する、縄文時代と奈良・平安時代の広大な遺跡である。

平成22・23年度に清水遺跡(1)～(4)の地区に分け

て第1～6次調査を行っている。今回は、その地区の(1)～(3)の東北中央自動車道(東根～尾花沢間)の事業範囲に係る未調査区と一般県道村山大石田線村山北1 IC 設置工事のスマート IC 部分について調査を実施した。

調査は、先に清水遺跡旧(1)の未調査部分(農道)を主に行い、その後、清水遺跡旧(2)・(3)のスマート IC 及び中央道部分(市道)を行った。

最初に、重機で遺構を確認できる深さまで表土を除去した後、手作業で土を削り(面整理・遺構検出作業)、遺構の確認をした。その後、見つかった遺構を移植コテで掘り下げ、断面図や平面図作成、写真撮影などの記録を進めた。

遺構と遺物

今回の調査では、縄文時代の^{おとしあな}陥穴と奈良・平安時代の^{どこう}竪穴住居跡、掘立柱建物跡、土坑、溝跡などが見つかった。

遺跡の南、旧(1)地区のH・G区からは奈良・平安時代の竪穴住居跡2基と溝跡などが検出された。

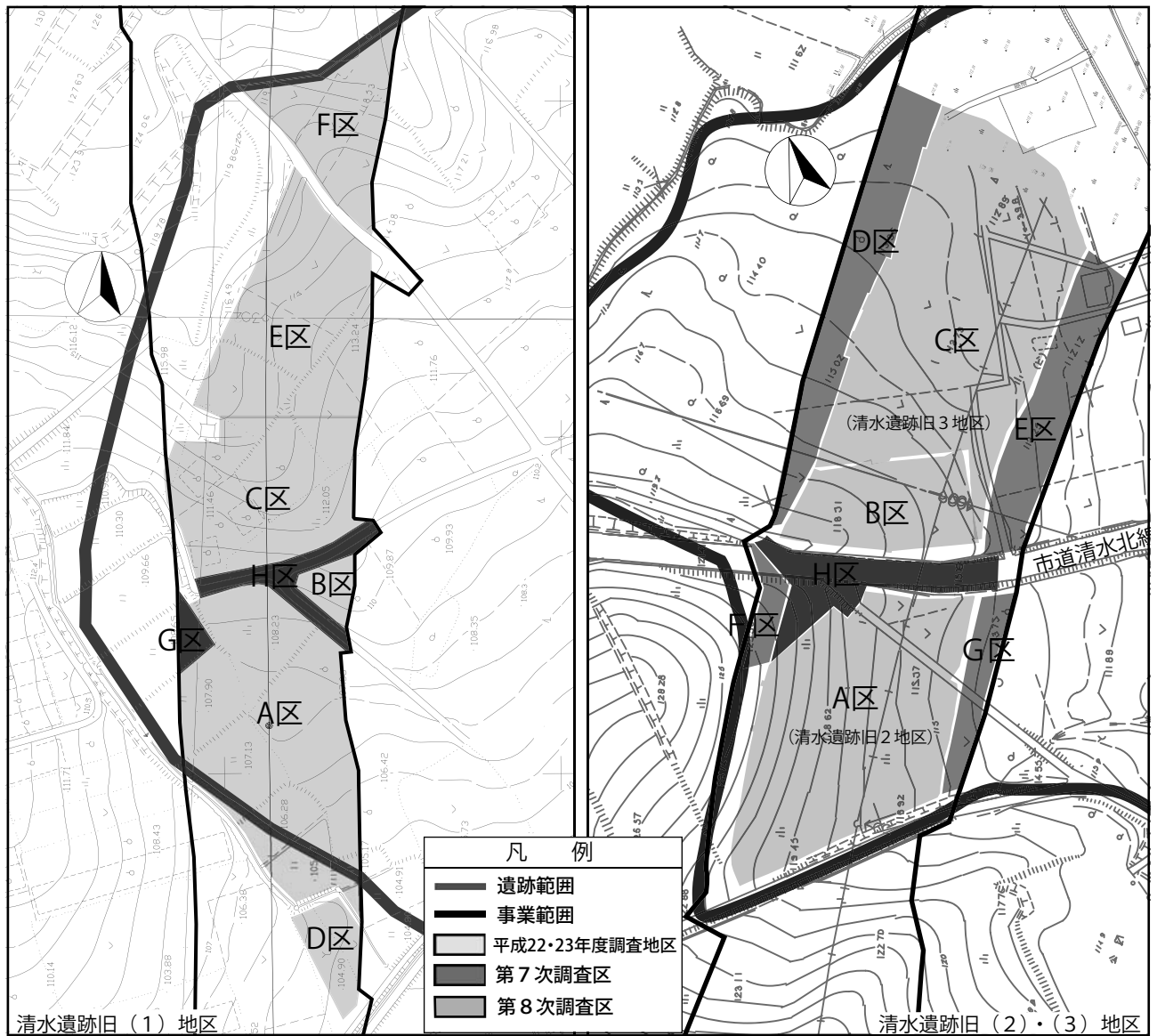


図1 調査区概要図 (S = 1 : 2,000)

住居跡 ST740 は緩斜面に構築され、規模が 4.8×4.5m で南東隅にカマドが造られていた。一部に粘土による貼り床が認められた。須恵器や土師器の甕、蓋、坏など多くの遺物が出土した。中には、墨で文字が書かれた墨書土器やミニチュア土器もある。住居跡 ST777 は北側半分のみであるが、須恵器の坏や土師器の甕などが出土している。また、G 区で見つかった溝跡は A 区から続く SD186 と考えられる。

遺跡の北、旧 (2)・(3) 地区の D・E・G・H 区からは縄文時代の陥穴と奈良・平安時代の竪穴住居跡、掘立柱建物跡、土坑、溝跡などが見つかった。F 区は抜根跡と重機による攪乱のみ、H 区の市道は、深さ 1.4m まで重機で掘削され遺構・遺物は削平されていた。

縄文時代の陥穴は D・E 区で各 1 基検出された。長さ

3 m、幅 40～50cm、深さ 1.0～1.2m を測る。これまでの調査でも B 区で 3 基、C 区で 1 基検出されていて合計 6 基となる。縄文時代の遺構は陥穴だけである。

竪穴住居跡は、D・G・H 区で計 9 基検出された。規模は 2.3m 四方の小さいものから、7.0×6.0m を測る大型のものもあり、G 区北側に重複も含め 6 軒が集中している。カマドは南側に多く設置され、遺物も出土している。ST381・383・384 はカマドが無く、規模も小さく ST384 からは粘土塊や板状の製品が出土したことから工房跡の可能性はある。H 区の ST448 の覆土から十和田 a と思われる火山灰が検出された。

掘立柱建物跡は、D・E・G 区で前回の調査区から続くものを含め、11 棟確認された。その規模と数は 2×2 間と 2 間×3 間が各 3 棟、3×3 間は 1 棟、内側に

も柱をもつ^{そうぼしら}総柱の建物は2×2間、3×4間、2×2間以上が各1棟そして、2×5間の^{がわぼしら}側柱＋総柱の建物が1棟である。そのうち、9棟がD区中央に集中し、平成23年度に見つかっている建物群の広がりである。これら建物跡は、その規模から大半が倉庫と考えられる。

D・E区の溝跡は、前回の調査区(C区)から続くもので建物群を囲む区画施設と考えられる。南北50m、東西80m以上の範囲を測る。

土坑はD区から直径2.0mを測る大きいものが4基検出され、多くの土器片が出土している。

遺物は、縄文時代の石^{せきぞく}鏃と石^{いしさじ}匙などの石器と奈良・平安時代の素焼きの土器で赤褐色の土師器、窯で焼かれた灰色の須恵器、砥石、金属製の紡^{ぼうすいしや}錘車などが出土した。土師器や須恵器には蓋、坏、高台付坏、甕などの器種がある。坏の底部の切り離し痕は回転糸切りが多数を占め、中には黒色処理がされた黒色土器や「縄」・「方」・「王」などの文字が書かれた墨書土器がある。

検出された住居跡や建物跡、溝跡などに造り替えや重複があることから、何時期かの変遷があったことが分かる。但し、出土した遺物に大きな時期差が認められないことから、短期間に建て替えが行われたと考えられる。

まとめ

今回の調査では、縄文時代の陥穴と9世紀を中心とする奈良・平安時代の集落跡、区画施設に囲まれた建物群など前回の調査区の広がりが確認された。

今までの調査結果から、最上川右岸の清水遺跡の丘陵は縄文時代には主に動物の狩場として機能し、8世紀末頃から人々が住み始め、9世紀には多くの竪穴住居が丘陵斜面に造られ集落が営まれた。その後、遺跡の北には住居に付随して建物や工房なども造られたと考えられる。一方、隣接する市道北側は、9世紀後半までには区画施設に囲まれた掘立柱建物群が建てられていた。

建物群は主軸方向がほぼ一致し、計画的に配置されている様子うかがえる。そして、中央西側に集中する建物群には掘り方の大きさが1.0m前後を測るものがあり、遺物にも大型の須恵器甕や墨書土器などがあることから、一般集落では無く、区画施設に^{ぐんが}囲まれた郡衙関連施設、または、地方豪族の居館跡^{きよかんあと}と考えられる。

なお、検出された火山灰から、この丘陵地の集落は短期間に何時期かの変遷を経て、青森県と秋田県の県境にある^{とわだかさ}十和田火山が噴火した10世紀初頭には廃絶されていた可能性が高い。



清水遺跡旧(1)地区

写真1 第7次調査区全景(北から)



清水遺跡旧(2)・(3)地区

写真2 第7・8次調査区全景(北から)

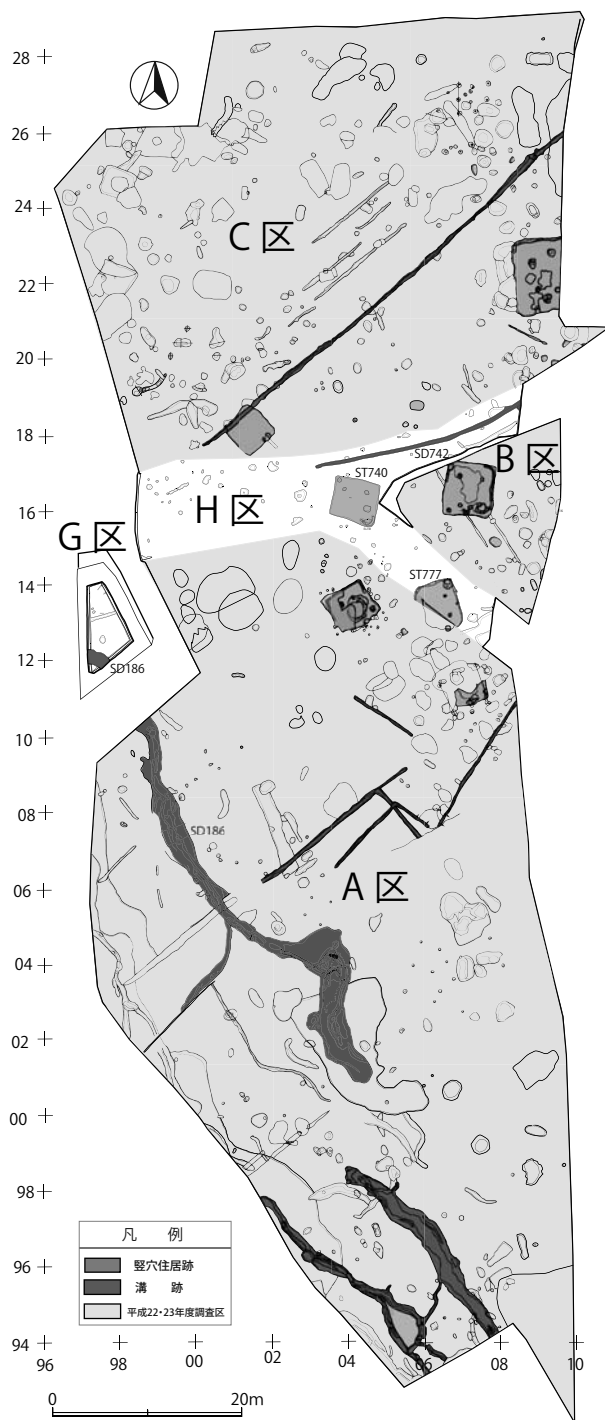


図2 第7次調査区遺構配置図 (S = 1 : 800)



写真3 ST740 竪穴住居跡遺物出土状況 (北東から)



写真4 ST740 竪穴住居跡のカマド (北東から)



写真5 ST777 竪穴住居跡遺物出土状況 (東から)

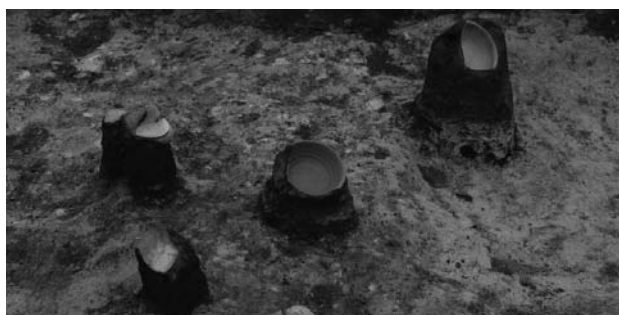


写真6 ST777 出土遺物 (南から)



写真7 ST740 出土遺物 (北東から)



図3 第7・8次遺構配置図 (S = 1 : 1,000)

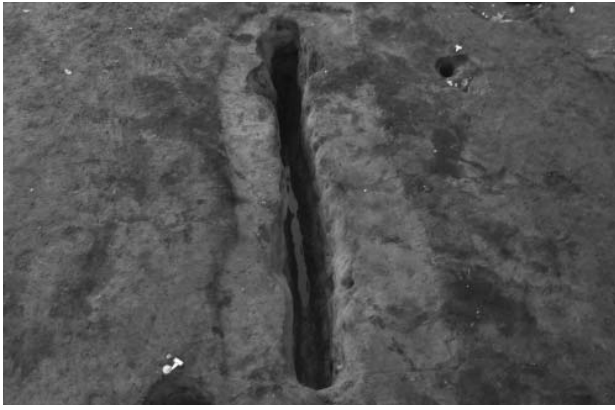


写真8 SK1911 陥穴（東から）

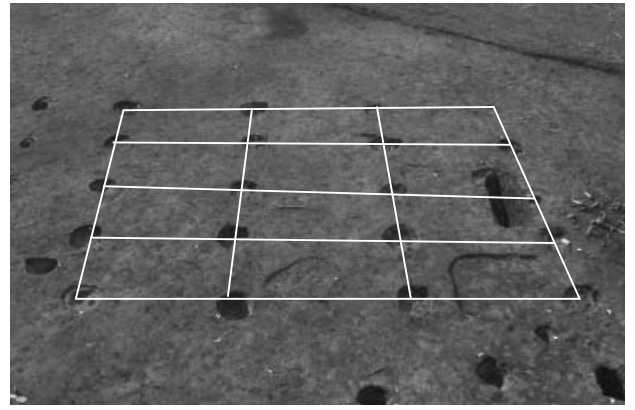


写真9 SB1697 掘立柱建物跡（東から）

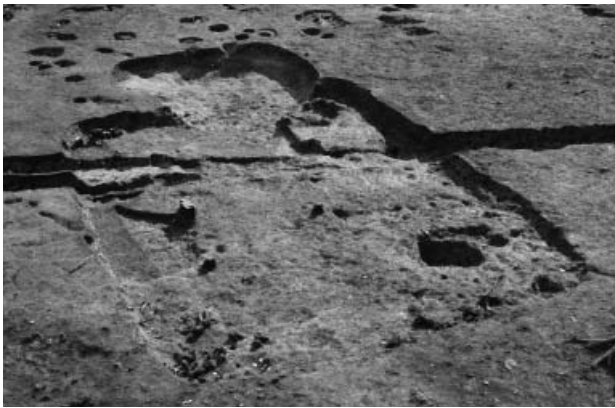


写真10 ST1818 竪穴住居跡・SK1819 土坑（北から）



写真11 G区竪穴住居跡（南から）



写真12 D区掘立柱建物跡群（南から）